

手柄山温室植物園だより

シリーズ：姫路市に見られる身近な植物

3 1. ムラサキサギゴケ（ゴマノハグサ科サギゴケ属）

Mazus miquelli Makino

2015年4月

日当たりのいいやや湿った路傍や田畑の畔などに生育する多年草です。花茎は高さ5～15 cmで、花後に基部から長い匍匐茎を出し、株を増やし繁殖します。葉は根生葉と匍匐茎につく葉があり、根生葉は柄のある倒卵形で長さ2～5 cm、幅1～1.5 cm、匍匐茎につく葉は小さく、柄がない円形に近い倒卵形で対生につきます。花は4～5月に花茎に総状花序をつくり、数個の花をつけます。花冠は長さ1.5～2 cm、紫紅色の2唇形で、上唇は狭卵形で深く2裂し、下唇は3裂で中央は隆起して淡黄色となり赤褐色の斑紋があります。ときに白花もありサギゴケあるいはサギシバ (*Mazus miquelli* Makino forma *albiflorus* (Makino) Makino) といいます。名前の由来は白花種がシラサギに似ているからでしょうか。分布は本州、四国、九州で、姫路市においては広く見られ、田んぼがあるところはよく見られます。和名表示に紫紅花のムラサキサギゴケと白花のサギゴケを統一してサギゴケとすることがあります。似たような環境に生育する類似種にトキワハゼ (*Mazus pumilus* (Burm. fil) van Steenis) があります。違いは本種が1年草で、匍匐茎を出さないことや花が小さいことです。放出された種子はいつでも発芽し、すぐに開花するので4月から10月ごろまで花が咲きます。このようにいつまでも花が見られるので「^{ときわ}常盤」の名前の由来になったといわれています。



ムラサキサギゴケ



トキワハゼ